



## 能は丁々発止の熱いライブ

幽玄の舞台上とは違って変わって、素顔の山本章弘さんはユーモアたっぷり。能の楽しさがダイレクトに伝わってきて、「この人が演じる能を見てみたい」と思わせる魅力にあふれている。

### 生でしか伝わらない

先日、テレビ局の人にお願いたんでですけど、「舞台を撮影する時は横から撮ったりアップにしたり、カット割りせんとしてください。全体を一台のカメラで撮ってください。映っていない役者も何らかの表現をしていますし、舞台全体で作品の世界を作っているんですよ。細切れにしたら分からんようになってしまうんです。

能舞台って見所(観客席)に突き出っていて、長い廊下もある。そやのに照明はあかりは一つだけ。だから前は明るいけど、後ろはほの暗い。でもスポットライトなんかで照らしたりはしません。お客さんに「隅の暗い所に亡霊がいるみたいや」とって錯覚を楽しんでもらうためです。これは生じゃないと感じてもらえない味わいですね。

### 自然の情緒と渾然一体

屋外の能舞台では、風の音や虫の声なんか聞こえてきます。他の芸能はこういった自然の要素を排除しますが、能は融合させてしまふ。かえって効果的な演出にもなっています。朝の光に神仏の来迎する様を舞ったり、夕闇に鬼畜

物を演じたり。

とは言っても昨今はよっぽど山奥でないと、飛行機や車の音が聞こえたりして、せっかくの雰囲気がない無しになることもあります。

### 同じ曲でも毎回違う

邦楽には絶対音感がありません。楽譜通りにきちっとするクラシックと違って、相対音感で決まっています。

くんです。謡いや音、調子は人によっても変わるし、その日の心境によっても影響が出てきます。観客が多いとウキウキ、少ないとゲンナリとか(笑)。

出演者全員で何日か前に打合せもしますが、これは「申し合わせ」であって、絶対ではないんです。早い調子でやろうと決めていても、舞台上に出たらえらいゆっくりしたお囃子になっていることもありま。そんな時はアップテンポで足拍



子を踏んで催促したり(笑)。

また当日の音合わせもないので、どんな音が奏でられるのか開演しないとわかりません。直前に「お調べ」というのはあるのですが、これはほんの音出し程度。というのは、鼓は早くから組み立てて打っていると調緒(ひも)が緩んでしまふし、太鼓は火鉢でずっと皮をぬくめておかないと湿度がこもってしまいますから。

本番では「ボンツ」と打ってほしい鼓が「ボスツ」、「ヒョー」という笛の音が「スー」としか鳴らないこともありますけど(笑)。それでもやっていくのが能のだいご味。一方、演者は加齢で足が上がりなくなるとそれを補う別の工夫をしていたり。という変化もあります。また解釈が変われば表現も変わりますし。同じ曲でも一つとして同じ内容ではない、再演できない究極のライブなんです。



### 空想力を養う

「子ども教室」、「少年少女羽衣うたい隊」「新作水の輪」など、子どもたちに能に親しんでもらう企画をいろいろやっています。

子どもに龍神の絵を描かせたら、次から次にいろんな顔かたちの龍神が出てくるんですよ。固定概念がないから。ポケモンやドラえもんやったら一様ですけど、空想上の存在は決まった姿がないから、百人の子がいれば百の姿が描かれるんです。

天狗を描かせた時、子どもたちが「天狗って何？」と聞くので「偉ぶってテングになっている人」と説明したら、納得していました。天狗は知らなくても、テングになつて人はわかつたんですね。

「子ども教室」風景

